

# トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一一） ―建築上の所見を中心に―

浦野 聡

キーワード

古代末期 聖堂建築 教会 司教座 古代都市

二〇一一年の夏シーズン、トロス司教座聖堂発掘チームは、まず、六月二十九日から七月九日にかけて、北側側廊と北側翼廊で（図1参照）、翼廊と身廊をつなぐ内部通路（ND2）の敷居石レヴェル（四七二・七五五m）まで発掘した。これは前庭部仕切り石列上面レヴェル（二〇一〇年度に発掘を止めたレヴェル）にほぼ一致し、聖堂内のモザイク舗床面から一〇～二〇cmほど上と推定されるレヴェルである<sup>1</sup>。現在までのところ、この面より上に堆積した土石からは生活痕が見つかっていない一方、七月二十六日に行った試掘により、翼廊部でこの面直下から、何らかの形で埋葬されたと考えられる人骨が出土したので、このレヴェルを、

モザイク舗床保存方法確定まで当面の発掘面としたことは妥当である<sup>2</sup>。なお、七月九日から二五日まで外構内側、および内構の各種測量を実施し聖堂北側廊部分の平面図を作成した。また、二八日に翼廊部舗床モザイクの試掘を行った。

以上の結果、建築上の所見として以下を得た。

## 1 腰高障壁

側廊部と身廊部を分かつ七本の北側列柱（NC1-NC7）には台座間を繋ぐ台座と同じ幅（幅約七〇～八〇cm）の腰高障壁が取り付けられていた。そのうち、少なくともNC1と聖堂西外壁間のそれは、

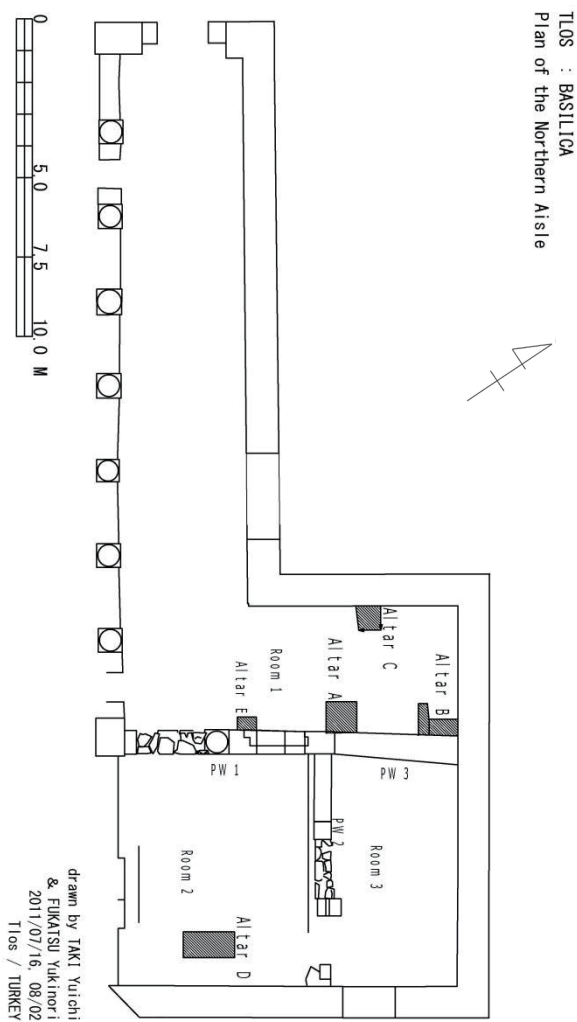


図1 聖堂北側廊・北翼廊平面図

聖堂建築時からかなり時代を下って取り付けられたものである。**8 参照**。障壁はいずれも、礫石・スポリア材と煉瓦を積んで隙間をモルタルで固めて作られたものである。障壁毎、積んでいる石の大きさや目地へのモルタルの乗せ方に違いが認められるが、それが築造時期の違いを反映したものであるのか、あるいは同時期に作業をした職人毎の工法の違いを反映したものであるのかについての認定は現段階では困難で、南側列柱の腰高障壁の発掘による知見を待ちたい。二〇一〇年度に出土した入り口から最初の北側列柱（NC1）の腰高障壁には漆喰が残っていたことから、それ以外の腰高障壁にも化粧漆喰が施されていた可能性はある。現況において、柱礎の上面は高さが揃っているのに対し、障壁の上面は、高さがまちまちである（NC2とNC3の間、NC4とNC5の間には柱礎の上面を超える高さまで石材が積まれているのに対し、その他は柱礎上面より二〇cm以上低くなっている。写真1参照）。低い障壁が崩落により元々の高さを失ったものか、高い障壁が後代の修築・改築により石材を積み増されたものかについては、現時点では不明である。なお、NC3とNC4、およびそれぞれの柱台脇の障壁の石材には、煤が付着していた。



写真1 NC3とその東側（左）と西側（右）の腰高障壁

東側の障壁には石材を繋ぐ目地にモルタルが残り、また上面も水平を取っているようであるのに対し、西側のそれには目地にモルタルが見られず、また柱の台座上面を超える高さにまで、上面の水平を取らずに石が積まれている。いずれにも漆喰の跡は残っていない。

## 2 内部通路

二〇一〇年度の発掘により列柱NC1とNC2の間に側廊部と身廊部を繋ぐ通路（ND1）が開けられているのを見いだしていたが、二〇一一年度は、NC7と、側廊・翼廊・祭壇部の結節点に積まれた直方体の石材から成る支柱の間にも同様の通路（ND2）が開けられているのを確認した（写真2）。この通路の上からは火の使用を示唆する炭化物の層と炭化物の付着したビザンツ中期（一〇〜一四世紀?）の彩釉陶片が見いだされた。

## 3 外部通路

側廊部北壁東寄りに開けられていた外部通路を後代に塞いだ痕跡と翼廊部東壁に開けられていた外部通路を後代に塞いだ痕跡を確認した（写真3）。いずれも比較的大きなスポリア材を用いてそれらの隙間を煉瓦で埋め、モルタルで繋ぎ固める工法によるもので、施工技術や精度はオリジナルの外壁のそれに近い（ややモルタルが少ない）。これらの通路を塞いだ年代については、現在のところ決定するのに十分な手がかりがない。

## 4 仕切り壁

翼廊部を三室に分かつ三枚の仕切り壁（PW1・3）が明らかになった（写真4）。PW2と3は

いずれも礫石・スポリア材と煉瓦を交互に積みモルタルで固めたもので互いに工法も類似している。建築材料は聖堂躯体外壁のそれと大差ないが、使用されているモルタルの少なさから施工強度は外壁に劣る（写真5参照）。これらの仕切り壁は、軸線を直角に正しく取りつつ厚さを均一に保つ外壁に対して、直角に取り付けられておらず、また厚さも均一ではない点で、設計・施工精度も外壁に劣る。PW3には通路は開けられていないのに対し、PW2には、東側隅に近いところに通路が開けられている。ほぼ直角に交わるPW2と3が同じ時期に取り付けられたものか、両者は直方体の支柱に各々独立に取り付けられているので建築構造上確証できないが、建築材料と工法において似通う両者が同時期に作られた可能性は高く、もしそうなら、これらの仕切り壁を作ったのがこれらおよび北側外壁と東側外壁で囲まれた部屋（第三室）を翼廊部にするためであったと想定しうる。もういモルタルを少量しか使っていないPW1の厚さと強度、施工技術はPW2と3のそれらにさらに劣り、そのため崩落の度合いも著しい。PW2と3とは異なる時代（後の時代?）のものと推定される。PW1の南には柱座が存在し、PW1と柱座の間に1mほどの通路状の空間が認められるが、





写真 2 身廊への通路 2 (ND2)



写真 3-1 翼廊部東壁の通路跡



写真 3-2 側廊部北壁の通路跡



写真4 北翼廊東側からPW2の軸線に沿ってPW1(左)とPW3(右)を写す



写真5 Room3 からPW2（左）とPW3（右）を写す

祭壇Eの設置によって通行を妨げられており、PW1の設置時から通路として構想されていなかったか、あるいは後に祭壇の設置により通路としての機能を奪われたものである。PW1の増築および祭壇Eの設置以後通路として機能しなかったならば、第一室と、第二・第三室は、それぞれ独立の空間として使用されたと考えられる。

## 5 小祭壇

翼廊部に、祭壇として用いられたと推定される五基の、高さ数十cmの構造体を見いだした（小祭壇A・E<sup>(4)</sup>）。そのうち四基は第一室（小祭壇A、B、C、E）、残りの一基は第二室にあり（小祭壇D）、最後のそれは壁体に接していない独立の構造体であった（写真6・10）。第三室にはいかなる構造体も見つからなかった。小祭壇Dは、発掘当初、表面の平らな大きな石板（23）を上部に頂いており（写真9）、これは祭具等を載せるのに用いられたと考えられる。小祭壇AとB、および小祭壇AとEの間に人骨が埋葬されており、さらにその下には床面を掘って石板で蓋をした石棺が見つかっている。これらの小祭壇は死者を祀る目的で設置されたものと推定される。小祭壇A西面には赤いフレスコ彩色で縁取りが描かれた漆喰の痕跡が残っている





写真 6 祭壇 A 最上段の煉瓦上、また瓦？を挟んでその下の煉瓦の上に漆喰の痕跡が残る



写真 7 祭壇 B



写真 8 祭壇 C



写真 9 発掘直後の祭壇 D（南側）



写真 10 祭壇 E



写真 11 側廊部に倒れていた柱（手前 9、奥 11A）と柱頭（10）

ので、これらの小祭壇は、建築材料（礫石、スポリア材、煉瓦）と築造法における相互の類似性に照らしていずれも化粧漆喰を施されていたであろう。これら小祭壇周辺からは漆喰を載せフレスコ画を描かれた煉瓦や彩色漆喰の断片が出土している（詳細は本号田中報告参照）。

## 6 柱

北側廊部から、フルートを施されていない灰褐色の地場産石製柱七件（1、2 a・b、7 a・b、8 a・b、9、11 a・b、16）が発掘された。これらは、いずれも、下部でおよそ五二 cm 以上、上部で四五 cm ほどの直径と四 m を超える長さを持った柱の主要部分であり、北側廊列柱の台座と翼廊の柱座の上で、聖堂の屋根と身廊を支えていた柱材と考えられる。最長部四〇二 cm を残し、もともと NC 6 に立っていたと考えられる発掘番号 11 A の柱材は、1 と同様、発掘以前の地表面にすでにその一部が見えていたものであり、コリント式の柱頭と共に比較的浅い地層から発掘された。他方、11 A に匹敵する三九一 cm の長さを持ち、NC 5 の上に立っていたものと考えられる発掘番号 9 の柱材は、11 A よりも深い地層から発掘され、その先端部は我々が発掘を止めたレベル近くにまで達していた（写真 11）。

これらの柱は、これまで側廊部でアーキトレーブの石材が見つかっていないことに照らせば、おそらく柱頭の上に外壁と同じ建築材料の礫石・煉瓦積みの、アーケード式クリアストリーを頂いていたものと推察される。柱材が発見された層位がまちまちなこと、最も深くから発見された柱材でも床面レヴェルにまで達していないことは次に述べる翼廊部における柱材の出土状況との違いである。

他方、もともと翼廊部PW1の南側の柱座上にあったとみられ、側廊部に向けて倒れていた16（長さ三〇四cm）の先端部は、9より深く、我々が発掘を止めたレヴェルの二〇cm近く下に埋もれており、おそらく聖堂床面にまで達していた。さらに、その数十cm北側に落ちていた、翼廊のブロック積支柱の上部の部材と思われる石材（III b）も、同じく床面レヴェルにまで埋もれて発見された（以上、写真12 a）。翼廊部の、これら柱材とブロックを覆っていた瓦礫がもっぱら煉瓦・礫石と瓦搏の混合によって成り立っていることから（写真12 b）、翼廊では、これらの支柱と柱の倒壊が梁と屋根の崩落と同時に起こったものと考えられる。

ところで、上述のごとく、翼廊では、発掘を止めたレヴェルから一〇〜二〇cm深く、床面レヴェルの上に

人骨が埋葬されていた。これらの埋葬跡は、瓦礫の下に埋まっていたから、翼廊は、その支柱倒壊時には、聖堂の一部としての当初の機能を失い、墓地として用いられていたと考えられよう。他方、これも上述のごとく、側廊では、列柱の柱台NC3と4、および近接の障壁に煤が付着しており、また内部通路ND2に火の使用の痕跡が見つかったが、柱やそのほかの柱台・障壁・外壁には高温で熱された形跡は見いだされず、また火災の跡を証明する炭化層も確認されなかったことに照らせば、これらの痕跡は火災によるものではなかったと考えるのが妥当に思われる。むしろ、建物が聖堂としての機能を失って後、列柱や壁体が大きく崩落して瓦礫に埋もれる以前の一時期（ND2の敷居石上から見つかった彩釉陶片の年代に照らして一〇〜一四世紀?）に、すでに木製の梁と屋根が落ちて除去されていたなどして火災の危険の少ない状況が生まれ、小規模な火の使用（焚火等）が行われていたという可能性が示唆される。

## 7

### 浮彫裝飾石板

翼廊と側廊の交差点あたりから翼廊にかけて、十字架やそれと関連する裝飾の浮彫を持つ石板が数点発見された。発掘層位はいずれも発掘を止め





写真 12a 翼廊部の柱材 (16) と支柱ブロック (手前 IIIb、奥に見えるのは小祭壇 E)



写真 12b 翼廊部の土砂の堆積 (中央下は浮彫装飾石板 18、右端に見えている石材は IIIb)

たレヴェルの直下である。厚さは多くは一〇cm以下と薄いから床面レヴェルまで一〇～二〇cm掘ればさらに何点かの断片を見いだしうる可能性があり、また祭壇部等未発掘の区域からも発見を期待しうるので、ここでは、建築装飾としてのそれに関する事柄のみを、聖堂の歴史に知見を与える限りにおいて記述する(個々の詳細については田中報告を参照)。

さて、発見された浮彫装飾石板は、完全体として残っているものはひとつもなく、最大の断片は最長部九一cmを残す58bであった。これと並んで発見された接合しうる断片58aと合わせると、横幅は最長部で一二八cmとなる(縦幅は五九cm)。そこには四つの十字架が連続して彫られているが、わずかに残る図柄右下の、十字架をアーケードで取り囲む列柱デザインの柱台座の形は、左から二番目、三番目の台座の形と同じであって、左端に描かれた台座の形とは異なる。この事実は、意匠上、この四番目の十字架が、左端の十字架と対をなす右端のそれではなかったことを示している。このことからこのレリーフは、最低五つ以上の十字架を連ねた図案を持ち、従って、この石板の横幅はもともと一五〇cmを上回る大きさであったと推定される。こうした意匠の横長石板は、中南西部小アジアの他の場所

からも見つかっており、祭儀を執り行う聖所を聖堂の他の部分から分かつテンプロンに用いられたものと考えられている。69a・bは縦幅がおよそ五七cmと58a・bのそれにほぼ一致しており、意匠は異なるが(意匠の上では69は58c、60、65などの断片的な石板と近親性を持つている)、同じ用途で使われていたと考えて良からう。18は、十字架上に手の込んだ装飾があり、下側面にも彫刻装飾を持つなど、発見された石板の中で最も入念な仕上げを施されていること、また縦幅も上部から十字架の中心あたりまで五〇cm近くある(壊れる以前は一〇〇cm近くあっただろう)ことから、元々は他の石板より目立つ重要な位置に設置されていたものと考えられる。テンプロンの部材であったかどうかは不明である。

これらの石板断片は、58a・b、63a・bは側廊から翼廊に折れてすぐの外壁近くから、18とその破片18a・cは翼廊の支柱16の下から、58cは小祭壇AとDの中間あたりの場所から、69a・bは小祭壇Bのそばからそれぞれ発見された。ビザンツ中期にテンプロンが用いられなくなった後か、あるいは聖堂の祭壇部が機能しなくなつて後に、これらの石板もその本来の用途を失い、翼廊の各室の壁面等に飾られていた可能性

がある。ここで発見された浮彫装飾石板がいずれも割れているのは、翼廊倒壊時等の衝撃によるものか、あるいは意図的破壊によるものか、現在のところ判断できない。しかし、もし前者であるなら、今後、床面レヴェルまでの発掘により、さらに多くの断片が見つかり、幾つかは完全に復元することも期待できる。その逆に、床面レヴェルまでの発掘により、符合する断片が見つからなければ、それらは人の手により持ち運ばれたり転用されたりしてしまったことであり、後者であった可能性が高まる。次年度以降の発掘の成果を待ちたい。

## 8

### 化粧漆喰と装飾

聖堂の壁や柱、障壁の化粧漆喰およびそこに乗せられたフレスコ彩色については、側廊外壁から翼廊外壁にかけ室内に当たる部分に広範にその痕跡が見いだされるが、詳細は本号田中氏の美術史的観点からの報告に譲る。ここでは、南側廊入り口と身廊入り口間の外壁内面にあって、腰高障壁との接合部付近に施された化粧漆喰・フレスコ彩色と、翼廊部ブロック支柱に残された化粧漆喰・フレスコについて、南側廊と身廊聖堂建築の修改築に関し情報を与えてくれる限りにおいて触れておきたい。

写真13に3、4として示したのは、南側廊と身廊間の列柱を繋ぐ腰高障壁が入り口の外壁内面に接する境目部分である。写真ではわかりにくいのが、3・4いずれの箇所でも、腰高障壁に隠された部分の外壁内面にまで、化粧漆喰・フレスコ彩色の施されていた痕跡が存在する。この事実は、聖堂使用が始まった当初、腰高障壁は設置されておらず、西側外壁内面が床まで装飾されていたということを示す。さらに興味深いのは、漆喰が、写真で1として示した層と写真で2として示した層の、少なくとも二層にわたって塗り重ねられており（数字の2の左手の面に九力所、槌跡が見られるが、これは新しく塗った漆喰を落ちにくくするための加工と考えられる）、しかもいずれの面も腰高障壁に隠された部分にまでフレスコ彩色を施されているという事実である。このことは、腰高障壁の設置以前に、比較的長期にわたる聖堂使用期間があったということを示唆しているよう。2の漆喰が塗られてからの聖堂使用期間については容易に推定しがたいが、少なくとも、フレスコ彩色まで施すからには、1の漆喰面で使用された期間程度、フレスコ面の劣化が美観を損ねるまで使用する目論見であったものと思われるし、また、1の面は、退色や一部崩落など漆喰の塗り直しを必要とするほど





写真 13 南側廊・身廊境、腰高障壁に接する聖堂西壁内側のフレスコ

のフレスコ面の劣化を経験する時間的経過があったと見るべきだからである。その期間は、地震のような自然災害の影響を想定しなければ、数十年～数百年のオーダーで考えても良いかも知れない。いずれにせよ、最初の聖堂建築時の設計においても、また実用に供されてからしばらくの間も、側廊と身廊の分離は、少なくとも入り口付近ではなされていなかったことは明らかであろう。この聖堂には、拝廊の痕跡が見当たらないが、そのことと入り口付近の腰高障壁の不在の関係は今後の検討に値する。

翼廊部のブロック積み支柱側面では、四面全体に漆喰とフレスコ装飾が施され、ここでも、その上に、後代新たな漆喰を乗せるために付けられたと思われる槌跡が広範に見つかった。この漆喰面は、西面でそれに接する小祭壇Aや仕切り壁2と3の接触面に隠された部分にも続いているようであるので、小祭壇や仕切り壁は、フレスコ装飾面を四面に施された支柱が露わになったまま使用されていた期間の後、後代に設置されたものと考えられる。現在確認される槌跡の残る漆喰の上に、後代の漆喰が塗り重ねられた痕跡は、現在表面に出ている部分でも、小祭壇Aの裏側でも、土砂が詰まっ

## 9 墓と石棺

翼廊部第一室で、発掘を止めたレヴェル面の調査をしていたところ、仕切り壁3の足下、小祭壇AとBの間、およびAとEの間に人骨を見いだした。緊急発掘の必要を認め、急遽発掘した結果、その下からは、モザイク舗床を壊し、スポリア材を用いて作ったと思われる石棺（NT1とNT2）をそれぞれの場所から発見した（写真14a～d、写真15）。この石棺については、二〇一一年度には発掘を見送った。

これら石棺の上に載せられていた人骨については、何体分のそれかわからないほど乱雑に散らばっており（たとえば写真14c・dに明らかのように大腿骨が頭骸骨の部分にあったり、別の大腿骨が壁と小祭壇の隅にあったりするなど）、遺骸を丁寧に墓室や棺に埋葬したものではなく、すでにどこか別の場所で白骨化していた遺骨を集め、石棺のある場所の上に、埋葬し直したか、あるいは応急的に土をかぶせただけのもののようである。教会聖堂内部の石棺の上に葬られていたことから、キリスト教徒の遺骨をキリスト教徒が葬ったものである可能性が高い。NT1からは遺骨に混じり、十字架のレリーフをとどめた二〇cm前後の石片が出土した（田中報告図9参照）。これを墓標・墓誌代わりとしたものかは不明である。遺骨の損壊と風化が甚だしく、死亡

原因等についてはわかに分らなかった。イスタンブール大学の人骨分析教室に送った。



写真 14a 小祭壇 A と B 間の遺骨



写真 14b 小祭壇 A と B 間の遺骨を取り去って現れた石棺 (石棺 NT1)



写真 14c NT1 上の遺骨



写真 14d NT1 上の遺骨





写真 15a NT2 上の遺骨



写真 15b NT2 の石棺

注

- (1) 北側翼廊部と祭壇部の境界近くを床面レヴェルまで試掘したところ、一〇cm下のレヴェルにモザイク舗床が見いだされた。その一方、二〇一〇年度に、身廊部入り口に倒れていた稜石や支柱等石材（B1-1、D-13、14、15、16）を掘り出して移動したが、これら石材は、我々が当面発掘を止めているレヴェルより最大で六〇cm下に埋もれていた。このことから、入り口辺りの床面レヴェルは、前庭部を前後に分かつ仕切り石や、聖堂内の、少なくとも翼廊部と祭壇部に近い側廊の床面レヴェルより最低数十cm低かったものと推定される。ただし、実際にどのような立体プランになっていたかは、実際に床面レヴェルまでの発掘を終えるまで、明確にはしえない。なお、一一年度の発掘参加者は、浦野の他、師尾晶子、太記祐一（平面図作成）、田中咲子、深津行徳、齊藤優子である。
- (2) 二〇一〇年度に前庭部仕切り石列西側に見つかった二基の墓もこのレヴェルの下にあった。
- (3) 深津行徳「都市と祭祀空間―二〇一〇年度トロス遺跡聖堂遺構予備発掘調査報告『史苑』七一・二、二〇一一、一〇七頁の図を参照。二〇一一年度には風雨により殆どすべて流されてしまっていた。
- (4) もうひとつ、未発掘の祭壇部との境界に同様の構造体を見つけたが、祭壇部の発掘の結果によつては、他の五つのように小祭壇としての機能を想定しえない構造物であることが明らかになる可能性があるのでナンバリングは控えた。

（本学文学部教授）

The site of the Tloan (plausibly episcopal) church occupies the northern part of a terrace (35m x 50m; 3m above of the palaestra and the baths respectively to the west and to the south), the supposed ancient temenos in the southern part of which the Kronos temple was located. Its ground plan is a so-called pseudo cross-transept with a spacious atrium instead of a narthex, similar to those of the main churches in Perge and Patara, while its construction method and materials are much resemble to those of the Xanthian basilicas.

In 2011 season, rubbles were removed from the entire area of the north aisle and transept down to the level (472.760m) which roughly agrees with that of the threshold of the passage from the aisle to the nave (472.755 m). As a result of this work, it turned obvious that the north transept had been later divided into three rooms (Room 1-3) by three partition walls (PW 1-3) in different times; they are intersected each other at the piled block pillar (covered with remnants of lavishly frescoed plaster) which is thought to have supported the timber roof over the north transept. The side entrances of (or doorways to the still unattested extensions from) the aisle and the transept were later blocked off. The quality and accuracy of their masonry (of mortared stones and bricks piled up alternately) is poorer than that of the outer walls (also of mortared stones and bricks); PW 3 is attached to the north outer wall not at the right angles, while each outer wall is set up carefully almost in line and intersected to each other at right angles. The wall between Room 1 and 2 (PW1) is far thinner and of poorer quality masonry with less glue of mortar.

Alongside PW 3 in Room 1, four brick/stone piles, perhaps altars (Altar A-C, E) with remnants of frescoed plaster were found. Immediately beneath the ground between these altars (A, B, E), human bones were found scattered over slate-covers of the supposed two tombs (which were not excavated in this season). These facts allude to the plausible possibility that Room 1 was used as a burial chamber in some time when or after PW3 was constructed. On the same level as these bones were found, fragments of Byzantine or Seljuq glazed pottery (11-14th centuries) were excavated, some of which were discovered on the threshold of the nave stained with ashes of remains of fire. Remarkably discovered were fragments of late antique or Byzantine religious furniture with reliefs (those of the templon?) near the altars (a limestone slab with a series of, at least four, crosses carved, and others with cross-reliefs). They seem to have been reused after they had been damaged from unknown reasons. At the moment, it is not clear how old they are and for what purposes they had been used before and after their being damaged.

In Room 2, there was held a trial digging of floor mosaics which emerged at about 0.10 m below the present ground level (472.744m).